

## 図画工作科で重点的に育成を図る資質・能力とその手だて

中川 佑紀

小林 優毅

挑戦心

題材と出会い、自分の思いを実現しようとする

### ①実態に合った題材や主題と出合わせる

図画工作科では、題材や主題との出会いを大切にしている。題材や主題との出会い方によって、子どもの発想や表現が豊かになると考えているからである。題材や主題に出合わせる際にも様々な出あいがある。その中から、ここでは絵本、材料、アーティストとの出あいについて具体的に述べていく。

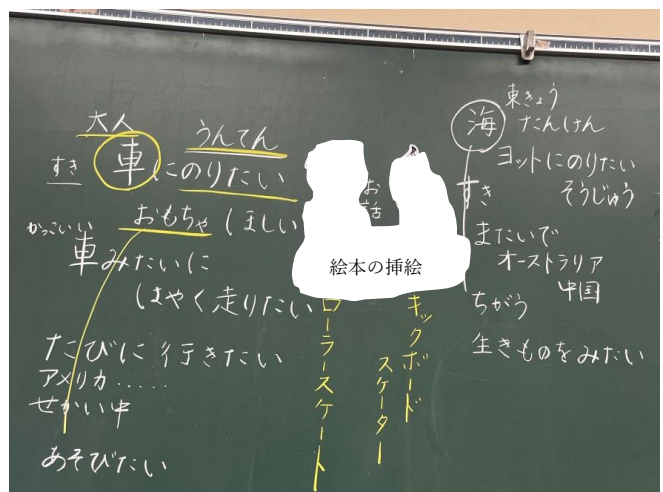
第2学年「へんしんッ！～すてきなぼうし～」では、絵本に出合わせた。本題材のねらいは、「自分の感覚や行為を通して、形や色に気付き、新聞紙、芯などの紙材やのり、ボンドの扱いに十分に慣れるとともに、手や体全体の感覚などを働かせ、表したいことを基に表し方を工夫して表している」「形や色などを基に、自分のイメージをもち、夢のすてきなぼうしから想像したことから表したいことを見付け、好きな形や色を選んだり、いろいろな形や色を考えたりしながら、どのように表すかについて考えている」である。

1学期の国語科で、物語「ミリーのすてきなぼうし」を学習している。この「ミリーのすてきなぼうし」の絵本に図工で再び出合わせることにした。帽子屋に並ぶ美しい帽子、街を歩きながら、次々に形を変える自分の帽子、街の人のかぶる様々な帽子が、挿絵には登場している。子どもは、絵本の世界のすてきな帽子と出会いながら、「自分だったらこんな帽子がほしいな」という思いをもち、お話の世界に浸っていた。イメージした帽子を、実際にかぶることのできる「すてきなぼうし」に表現することを主題としたことで、意欲的に活動することにつながったと考える。

そして、絵本の中の街の人の帽子に出合わせた。街の人のかぶる帽子の挿絵を提示し、「この男の子は、どんなことを考えているのかな」と問うた（資料1）。

左の男の子の帽子は赤い車の形をしている。子どもは、すぐにその男の子が履いているローラースケートに着目して、「車みたいに速く走りたい」と気付き、車からイメージを広げた。「大人になって、車に乗りたいと思っているよ」と話した友達の話を聞き、「カッコいい車に乗りたいんだよ」や「その車で、旅に出たいと思っているよ。」「アメリカに行きたいよ」「いや、世界中に行きたいよ」などと、同じものを見て言語化し共有することで、どんどんイメージを広げていった。

右のヨットの帽子をかぶる男の子も同様に、キックボードからイメージを広げ、「ヨットみたいにスイスイ走りたいと思っているよ」「海に行きたいんだよ」と、楽しそうにイメージを広げていった。



資料1 挿絵に登場する帽子でイメージを共有

そのあとに、ティーポットとティーカップの帽子をかぶった女性とアイスクリームの帽子をかぶった小さな男の子の挿絵を提示した。すぐに「あれ？アイスクリームは公園にもないし、持っているわけでもないのに、なんで？」と、周りにあるものや持っているものに着目し、さらに心情的に想像をふくらませたり、自分の実体験を想起したりしながら、イメージを広げていった。「きっと、疲れたから紅茶を飲んで、ゆっくりしたいんだよ」「家に帰って、パーティーを開きたいなと思っているよ」「さっきまで喫茶店にいて、楽しかったなーって思い出しているよ」と、これまでは見えているところからの想像であったものが、見えないところにまでイメージが広がっていった。

これらの交流から、「自分だったら…」と自分の心の中にあるこうなりたいという夢へと「すてきなぼうし」のイメージをつなげて、ふくらませていった。

第2学年「くしゃくしゃぎゅっ〜クリスマスのともだち〜」では、材料と人に出あわせた。本題材のねらいは、「自分の感覚や行為を通して、形や色などに気づき、クラフト紙などの材料に慣れるとともに、手や体全体の感覚を働かせ、表したいことを基に表し方を工夫している」「くしゃくしゃにする紙の感触や形から、表したいことを見付け、好きな形や色を選んだり、いろいろな形や色を考えたりしながら、どのように表すかについて考えている」である。

本題材で使う材料はクラフト紙である。子どもは封筒や梱包材、紙袋などでクラフト紙を目にすることがある。そのクラフト紙と出合わせることから、題材を始めた。クラフト紙と出合った子どもは、「よく見ると、つぶつぶの模様が見えるよ」「においが、やきいもみたいに甘いにおいがするよ」「さらさらしているよ」などと話し、五感で感じている様子が見て取れた（資料2・左）。



資料2 クラフト紙を体全体で感じる姿

そのあとに「このクラフト紙には、ひみつがあるよ」と投げかけ、クラフト紙をくしゃくしゃと丸めて見せ、子どもにもその時間を確保した。子どもは、「あったかくなったよ」「やわらかくなってき。」「ふわふわおふとんみたいだ」と口々につぶやきながら、やさしく丁寧にもんでいた。このように、クラフト紙が布のようにふわふわになったことをお互いで確認しながら、さらに触った感じだけでなく、体全体で感じる時間を共有していた（資料2・右）。クラフト紙を存分に感じることで、自分の思いを表現する材料との出会いとなり、さらに愛着をもって表現する姿が見られた。

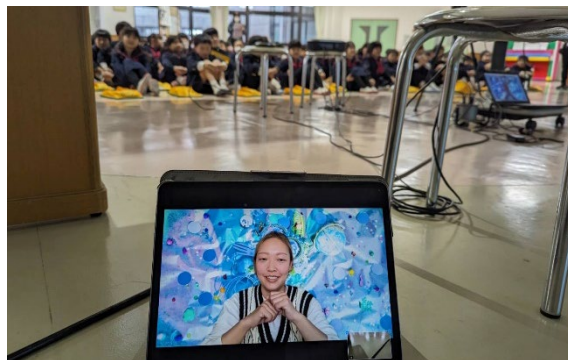
本題材の主題は「クリスマスのともだち」である。完成した作品は、石川県立図書館のクリスマスツリーにオーナメントとして飾り、見る人を楽しい気持ちにすることを題材のゴールとした。子どもは、この主題と出会い、「図書館に家族と見に行くのが楽しみ」と、自分の手でつくったものが学校の外で飾



られることを喜んでいた。「クリスマスと一緒に楽しむなら、こんなともだちがほしい」というイメージをふくらませることにもつながった。

そして、オンラインでアーティストと出会わせた（資料3）。出会わせたアーティストは、シャンデリアアーティストで、見る人が温かい、楽しい気持ちになれるシャンデリアをつくっている。アーティストの作品への思いを聞き、アーティストや友達との対話を通して、「ともだち」の大切さに気付かせた。自分のつくりたい「ともだち」への思いをより明確にもたせることができ、子どもはその思いを表現していった。

このように、絵本や材料、アーティストの出あいから、言語化したり、感じたことを交流したりすることで、イメージが広がり、自分の思いをもって意欲的に表現することにつながった。



資料3 アーティストと出会う

## ② 試行錯誤できる材料や時間を確保する

「へんしんッ！～すてきなぼうし～」の帽子的形をつくる材料には新聞紙とトイレットペーパーの芯を使用した。子どもにとって身近である新聞紙で土台をつくり、その上に新聞紙とトイレットペーパーの芯を使って形を表現させた。身近にある材料ということもあり、各家庭から材料を持ち寄りやすく、多くの材料を準備することができた。材料が多くあることで、子どもは安心して試行錯誤し、様々な表現につなげることができた。

本題材では、実際に帽子をつくる前に材料と触れる時間を確保している。これまでの実践もそうであるが、図画工作科として作品をつくる前に、材料を感じる時間を設けている。ここでは「新聞紙を3分で変身してみよう！」と手のひらサイズの扱いやすい量で渡し、変身する時間を確保した。これまでの題材でも同じ活動を取り入れてきたこともあり、どんどん手を動かさず姿が見られた。子どもは、はさみや手を使い、おる・あむ・曲げる・ねじる・丸めるなどの技が、新聞紙でもできることに気付いていた。友達と交流したり、その変身した材料と技を掲示したりすることで、さらに試行錯誤するきっかけとなった（資料4）。

試行錯誤して使わなかったものは捨てるのではなく、「おたからばこ」を設置して、アイデアを発見できるようにした。そうすることで、材料を無駄遣いしてしまうことへの罪悪感もなく、どんどん試すことができると考えたからである。子どもは思いついたら、すぐに材料を取りに行き、試す。そして、自分の作品では使わなかった変身した材料を、「おたからばこ」に入れる。材料置き場の隣に「おたからばこ」を設置したことで、材料を取りに



資料4 「材料の変身」の掲示

来たついでに「おたからばこ」を覗いて、パッと手に取ることができる。そこから新しい技を発見する

子どもや「おたからばこを見て、新しいこと思いついた！」と嬉しそうにする子どもがいた。ここから、次々と新しい表現に広げていく姿が見られた。

このように、試行錯誤できる材料や時間を確保することで、新しい技を発見する姿が見られた。材料や時間の確保だけでなく、「おたからばこ」を設置したことやその場所についても、子どもが挑戦する力につながったと考える。「おたからばこ」を通じて、友達の技にも目を向けたり、そこから新しい技を見つけたり、さらに自然と交流することにもつながり、自分の思いに合う表現を実現することができた。

伝える力

自分の思いや表現の工夫を、伝えることができる

### ①表現や鑑賞の活動がしたくなる課題を設定する

「へんしんッ！～すてきなぼうし～」の第一次では、絵本「ミリーのすてきなぼうし」に登場する帽子から、「すてきなぼうし」のイメージをふくらませた。主題である「すてきなぼうし」から「みんなのすてきな夢は、どんな夢かな？」と問うた。「いろいろなものの、考えていることがわかるようになりたい」「ようせいになって空をとびたい」「スズメといっしょに南の島に行きたい」など、すてきな夢のイメージを広げていった。帽子を表現するときに、よりイメージを広げやすくするために、みんなのすてきな夢を提示した。子どもは、友達の夢にも自然と興味を示し、それぞれの夢を共有し合うことで、「夢にぴったりの形になってきたね」という交流する姿が見られた。

第二次では、帽子の形をつくっていった。帽子の土台は新聞紙で作り、自分の頭にぴったりの形にした。世界に一つだけの自分の帽子の土台ができただけで、子どもは何度もその土台だけの帽子をかぶっていた。子どもは、ハロウィンパーティーや行事などで仮装をすることで、心が高揚するような経験をもっている。このことから、「すてきなぼうし」についても楽しみながら表現することにつながった。そして、<ぴったりの形は？><ぴったりの色は？>と課題を設定することで、自分の思いを「すてきなぼうし」で伝えようとしていた。

「くしゃくしゃぎゅっ～クリスマスのももだち～」では、学年全員で授業を行うこととした。さらに学年全員が交流しやすくするために広い場所を設定した。その上で、全員でアーティストとのオンラインをしなが、交流し合う活動を進めていった。資料5のようにはじめは、自分の作品にだけ目を向けていたA児とB児が、活動が進む中で自然に交流がうまれ、作品を見せ合ったり、どうしたらいいかを



資料5 自然な交流がうまれる場の設定

相談したりしながら、活動する姿が見られた。また、その様子を見ていた友達も話を聞きに来る姿も見



られ、表現と鑑賞をくり返しながらか、自分の「ともだち」を表現していった。

このように、表現や鑑賞の活動がしたくなる課題を設定することで、友達の作品に目を向け、言葉に耳を傾け、自然と対話がうまれ、自分の思いを伝えたいことがわかる。

## ②交流の内容や形態、タイミングなどを吟味する

どの授業においても、自ら交流したくなる場の設定を考えている。「へんしんッ！～すてきなぼうし～」でも、効果的に交流がうまれやすくなるように、新聞紙、トイレットペーパーの芯、お花紙等の材料やそれらを置く場所、活動の形態を工夫した。さらにこの題材では、「すてきなぼうし」をかぶった自分の姿を確認するために鏡を用意した。鏡は教室の背面に設置することで、材料を取りに行くついでに自分の姿を見たり、友達の帽子を見たりしていた。その中で「かわいいね！」「夢に合う色だね」とよさを伝えたり、「どんな技を使ったの？」「どうしてその形にしたの？」と、技や思いを質問したりする姿が見られた（資料6）。また、オンラインでつながったアーティストと実際に出会えたことで、自分の作品についてアーティストと交流する姿も見られた。



資料6 鏡を設置したことでうまれる交流

交流活動を活発にするために、教室の中心に台を設置し、机の形態を工夫している。「この台には名前があつて、これに乗るとにこにこできるから『にこにこしほう台（し放題）』と言うよ。『こんなすてきになったよ。見て！』『ここ困ってるんだ。教えて！』っていうときに使う台だよ」と紹介してある。子どもは、自分のタイミングでこの台に乗って話をする。聞いている子どもは活動をしながら、友達の作品を見たり、話に耳を傾けたりしやすくするために、机は真ん中の台に向けた（資料7）。



資料7 真ん中に向けた机の形態（左）・にこにこしほう台（右）

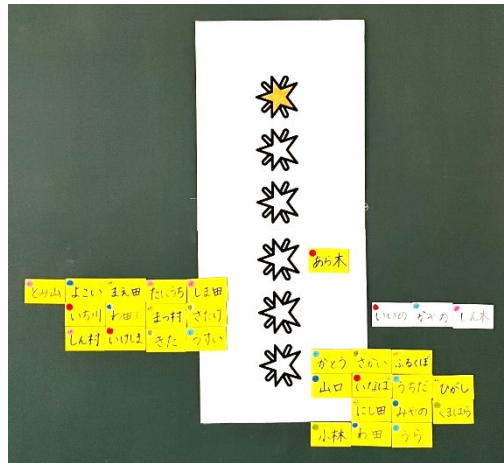
このように、材料などを置く場所や台の設置など、教師が意図的に場をつくることで、自然と交流の場がうまれ、それぞれのタイミングで思いを伝え、自分のイメージを広げることができた。

評価する力

変容をふり返ることで、自己の成長に気付くことができる

### ①思考や表現の過程を可視化できるようにする

「へんしんッ！～すてきなぼうし～」では、今の自分の「すてきなぼうし」がどのくらいすてきなのかを「すてきパワー」として可視化した。授業のはじめに、マグネットで「すてきパワー」を位置付け、授業の終末にも同じことを問うた(資料8)。レベルアップした子どもは、マグネットの色を変えて貼り直した。その変容をワークシートに文章で記入し、蓄積していった。子どものふりかえりには、「友達の芯をくるくる(螺旋状に)ちぎる技を見てやったら、自分の夢(海の中で魚と泳ぎたい)にぴったりの形になったよ」と書かれていた。また、「友達がお花紙をべったりはらないで、ふわふわにはっていたのを見てやってみたら、スズメのふわふわのかんじになってきたよ」「次は、虹の間に花をいっぱいつけて、お花畑にしたいな」と、友達の技から自分の思いにぴったりの表現になったことやしてみたいことを書いている子どももいた。



資料8 すてきパワーで変容を可視化

このように、すてきパワーやワークシートに可視化し、蓄積することによって、自分の思いや形や色へのこだわりに対する変容や成長に気付くことができた。また、蓄積することで、次時や次の題材への意欲や表現につながったことがふりかえりから見取ることができた。

### ②自己の成長を実感できる場を設定する

「くしゃくしゃぎゅっ～クリスマスのもだち～」では、完成した作品を子どもが自分の手で石川県立図書館に飾ることにした(資料9)。自分の思いを形にできたことを家族や周りの人に見てもらい、自己の成長を実感できると考えたからである。自分の手で飾りに行く機会をもつことで、作品を家族に見せながら、自分の思いを話す姿が見られた。子どもは、嬉しそうにツリーに飾ったり、家族と写真を撮ったりしていた。1ヶ月間の展示期間を設定したことで、いろいろな人と見に行き、自分の思いを聞いてもらえた喜びを話していた。

「へんしんッ！～すてきなぼうし～」では、完成した「すてきなぼうし」をかぶり、学年全員で集った。アーティストや、協力してくれた地元企業のゲストティーチャーの前で、自分の「すてきなぼうし」にこめた夢への思いや完成した喜び、工夫したことなどを伝える場を設定した。「アドバイスをもらったおかげで、自分の帽子がもっとすてきになったよ」と、子どもは伝えていた。

このように、自分の作品を見てもらったり、自分の作品への思いを聞いてもらったりする場を設定することで、自己の成長を実感できる場となったことが見て取れた。



資料9 公共施設に作品展示